

# 中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

大町高等学校

## 自分の勉強としての安全登山指導者中央研修会

今年もまた、国立登山研修所から依頼があつて、6月26日から29日の3日間、安全登山普及指導者中央研修会の講師を努めさせていただいた。平成21年に研修所が独立法人になって始まった研修会だが、夏と秋に年に2回、同じ研修会が行われるので、今回が通算13回目の研修会である。2011年の秋の研修会は長山協の50周年記念祝賀会と重なったので欠席したが、それ以外はずっとお手伝いをさせていただいてきたので、かれこれ12回目の参加である。

最初は私自身がモタモタしており（今もそうかも・・・）、研修生の皆さんにご迷惑をおかけした部分もあった。発足当時は新潟県高体連登山部の新保先生も講師をお努めだったので、心強かったし、もともと文登研時代にあった「高校山岳部顧問向けの縦走研修会」の発展型でもあったので、研修生の中には当初から全国の山岳部の顧問の先生もいつもおられ、全国の状況に触れるいいチャンスでもあった。そんなわけで、研修生からも刺激をもらいながら、いつも結構緊張感をもつての研修会への参加である。今回も何人かの高校の先生方とお知り合いになることができた。

緊張感をもつてということの謂いはもう一つ理由がある。それは、この研修会の持ち方と充実した講師陣にある。この研修会は、2種類の研修会が同時展開で開催される。一方は「登攀技術研修コース」であり、片や私がずっと講師を努めているのは、「読図プランニングコース」である。両者は同時に行われる関係で、講師間の情報交換が同時に行われる。したがって、読図は当然だが、登攀班で行われている内容も耳にはいつてくる。こうしたコースを越えた講師間の情報や技術の交流は、大変に楽しくかつ有意義な時間となる。そしてこの講師陣が国内では、最高レベルの充実ぶり（私などは末席を汚しているというのがせいぜい）、一定の縛りもあるのだろうが、「国立」というだけあって、県レベルでは考えられないような予算がついているので、毎日の研修が終わった後の懇親会は、様々な目からうるこの落ちるようなまさに珠玉の時間である。

これまでの12回でも多くの講師の方と知り合いになることができ、これもまた私にとっては大きな財産となっている。今回もまた一人の地図読みのスペシャリストから、多くのものをいただいた。豊川山岳会の河合芳尚さん。高校時代に山岳部にはいつて読図の楽しさに目覚めたという。河合さんのノウハウは、氏が所属している豊川山岳会のHPで紹介されている。ぜひ一度覗いてみてほしい。愛知県山岳連盟でも屈指の地図読みの技術が整理されている。読図の基礎から、過去の道迷い遭難事故の原因分析など見るだけでもためになることは請け合いだ。アドレスは、<http://toyokawa-ac.jp/map> なので、ぜひ一度ご覧ください。

### 山のリスクと向き合うために 村越真・長岡健一著(東京新聞出版局刊)

上記研修会を運営するための以前講師研修会でお世話になった静岡大学の村越真先生が、クライマーの長岡健一氏との共著で標記の本を出版された。まだしっかりと読みこ

なしていないのだが、第1部は登山におけるリスクとは何かを理論的に説く。山で出会う危ないことは日本語では一般に「危険」と呼ぶ。だが、筆者は「危険」という言葉は曖昧で多義語であり、英語の「ハザード」と「リスク」という言葉にわけて考えるべきであるという。「ハザード」は「リスク」の原因になるが、「ハザード」があるだけでは「リスク」は生まれない。ここから説き始め、登山における「リスク」を過去の遭難事故の統計をもとに、様々な角度から分析をする。

そもそも登山はリスクそのものが魅力でもある。そんな活動の最前線にいるのが、いわゆる一線級のアルパインクライマーであろう。第2部では、そんな一線級のアルパインクライマーへの聞き取り調査の中で浮かび上がって来た彼らのリスクマネジメントについて分析し、そこから導き出されたリスクに対する視点とリスクに対応するための方略の考え方が提案される。そしてそれを踏まえた上で、遭難の原因の主なものを取り上げて、それぞれにおいてシナリオ、要因や兆候という視点から特徴をとらえ、リスク対応の実践的な指針が展開されている。そして、これを具体的に自分のものとするために、筆者はいわゆるアクティブラーニングの観点から座学によって身に付けることを試みている。座学というと何か堅苦しく、実践的でないきらいもあるが、実はここがこの本の一つの勘所だと感心した。もともと極めてすぐれた「地図読み」である村越先生のまさに面目躍如である。そもそも我々は山に入る前に計画書を作る。そしてその基本になるのは「地図」である。地図を読む中で、具体的なコースのイメージをし、想定されるリスクを洗い出し、そこでのシナリオを描き、装備や食糧計画を立て、危険予知をする。その丹念な作業こそ、リスクをマネジメントするスキルを高める演習である。ぜひ、本書に書かれた演習を実際に体験する中で、その世界を実感してほしい。実際、高校山岳部の実践トレーニングには最適だと思う。

最終第3部では、リスクを考えると題し、まず登山者の責任と義務を論ずる。そして、最後に不確実な自然の中ではプラン通りにいかないこともしばしばであることを改めてとりあげ、そんな中でオンサイト（臨機）の対応ができることが、一つの楽しみとして、またリスクを乗り越える知恵として述べられている。

村越さんは冒頭で、この本は「理論的」視点で実践を見ることを心がけたという。山で我々はしばしば感覚的に行動する。しかし、見えない危険が潜んでいる自然と言うフィールドにおいて、村越さんが言うように、危険を予知する明確な考え方の枠組み、いかに言えば「理論」を身に付けることは、決して無駄なことではないはずだ。一読をお薦めします。

## 編集子のひとこと

6月末から長野県は「長野県登山条例」(案)を公開して、パブリックコメントを求めている。昨年岐阜県が定めた登山計画書の不提出への罰金を科すという条例に加え、近年の遭難の多発、それに追い打ちをかけるような御嶽の災害がその引き金になっているのは論を待たない。そこでは、登山者の責務や山岳会の責務を求めているが、そもそも自由な遊びである登山にお上からの締め付けは違和感がある。我々は自己責任の原則で自律的に行動することこそふさわしいとこれまでも登山計画書を策定し、自発的な提出などをしてきている。皆さんはどう考えますか？パブリックコメントは以下を参照してください。<http://www.pref.nagano.lg.jp/kankoki/sangyo/kanko/tozanjorei/public.html> (大西記)